

銀鈴会の投稿活動

上 村 ゆ う 美

(要約)

1947年二・二八事件から1949年四・六事件までの台湾文壇における具体的な文学活動については、無名の若いアマチュア作家や詩人が多かったこともあり、未だ解明が進んでいない。本稿でとりあげる銀鈴会は、そのような無名のアマチュア作家による文学グループの一つである。銀鈴会会員は会誌『潮流』での活動を基盤として、多くの中国語の作品を当時のあらゆる新聞の文芸欄に発表していた。更に1948年夏からは作家楊逵を顧問に迎えて指導を仰ぎ、一部の会員は楊逵が主筆を務める『力行報』の文芸欄「新文藝」で募集したテーマに沿った作品を投稿するなど、様々に楊逵と関わり影響を受けながら文学活動を広げていた。本稿では銀鈴会という具体的な文学グループの活動と楊逵の影響、投稿活動の舞台となった『台湾新生報』文芸欄「橋」や『力行報』文芸欄「力行」「新文藝」、会員の作品を通して、中国語文学が立ち上がっていく様子を明らかにする。

はじめに

1940年代後期、特に二・二八事件から四・六事件までの間の台湾文壇については、長い間文学の空白期という印象が強かったが、近年、四・六事件関係者の証言を集めた藍博洲の『天未亮』『麦浪歌詠隊』¹の書籍出版、「橋」紙上における台湾新文学論争の論文を集めた人間出版社の『台湾文学問題論議集』、丸川哲史の「橋」や楊逵に関連する研究²、許詩萱の「橋」の研究³、陳建忠の戦後初期の研究⁴等で、台湾文壇が意外にも活気があったことが分かってきている。大陸の国共内戦で国民党軍が劣勢になっていたことから、新しく台湾省主席になった魏道明が宥和政策に転じ、台湾文壇は一時の活気を取り戻したのである。この舵取り役をしたのが作家楊逵であった。楊逵は『台湾新生報』（以降『新生報』）の文芸欄「橋」の主筆歌雷と連携して1948年3月に本省籍の作家に投稿を呼びかけ、この呼びかけに応えた無名の若いアマチュア作家が四・六事件までの約一年間にわたり活発な投稿活動を繰り広げていた。

本稿でとりあげる銀鈴会は、そのような無名のアマチュア作家による文学グループの一つである。銀鈴会会員は内部の雑誌『潮流』での活動を基盤として、多くの中国語の作品を新聞の文芸欄に発表していった。1948年夏からは作家楊逵を顧問に迎えて指導を仰ぎ、一部の会員は楊逵が提唱するテーマで作品を書いたり、楊逵が主筆を務める『力行報』の文芸欄「新文藝」に投稿したり、楊逵が編集した『台湾文芸叢刊』第3輯に二篇の作品が収録されたり、楊逵と共に麦浪歌詠隊⁵を歓迎する座談会を開いたり、様々に楊逵と関わりながら文学活動を広げていた。残念ながら1949年の四・六事件で中心メンバーの朱實⁶が指名手配を受けて大陸へ逃亡、その後の白

色テロでは会員が次々に逮捕投獄され、政治的な圧力が強まる中で解散に追い込まれる。銀鈴会解散後に元会員の詩人の林亨泰⁷、詹冰⁸、錦連⁹、蕭金堆¹⁰、小説家の張彦勳¹¹等が台湾文壇で活躍し、また四・六事件で指名手配され大陸へ逃亡した朱實が漢俳¹²の第一人者の一人として活躍していることから見ても、四・六事件に始まる弾圧がなければ、会員個人としての活躍を銀鈴会が支える形で当時の台湾文壇に大きな影響を与えうる存在に成長する可能性もあったように思われる。少なくとも、後に台湾文壇で活躍した元会員の中国語創作活動の原点は戦後初期の銀鈴会の活動にあるといっていだろう。

銀鈴会については戒厳令下における政治的な弾圧を免れるため、会誌等の関係資料の多くが処分され、関係者も詳細については近年まで口を閉ざしてきたが、1980年代中期以降、張彦勳や林亨泰を始めとする台湾文壇で活躍する銀鈴会の元会員が次々に随筆や論文を発表し始めたことで、活動の実態が知られるようになった。しかし、銀鈴会の元会員の証言¹³は内部の事情に詳しいが、外部の活動、即ち銀鈴会会員の投稿活動については不明な部分が多い。また、銀鈴会に言及している研究の多くは「橋」の活動と楊遠との関係に注目しているが、その他の投稿活動の舞台については検証していない。

そこで、筆者は現存している会誌『潮流』¹⁴巻末の「会員文藝動態」¹⁵の記載を手がかりに原載にあたったところ、投稿先が『新生報』の文芸欄「橋」「台湾婦女」「学生生活」「習作」、『力行報』¹⁶の文芸欄「新文藝」「力行」、『中華日報』の文芸欄「青年園地」「青年時代」と多岐にわたることが判明した。中でも、傑出して投稿作品数が多かったのが『力行報』の文芸欄「力行」「新文藝」である。そこで本稿では「橋」の他に、彼らの投稿活動のもう一つ舞台として『力行報』の文芸欄を取り上げる。中国語文学が立ち上がっていく様子を銀鈴会という具体的な文学グループの活動と楊遠、投稿活動の舞台となった「橋」や「力行」「新文藝」、会員の作品を通して見ていきたい。

第1節 今までの銀鈴会評価

1. 銀鈴会の再評価を求める声

銀鈴会関係者がかつて文学活動の拠点としていた銀鈴会について語り始めたのは、1980年代中期以降である。その中心となったのは作家で銀鈴会の創始者の一人で『潮流』主編をつとめた張彦勳と会員の林亨泰であった。

銀鈴会の会誌『潮流』の主筆張彦勳は、早期には1964年に『笠』vol.4の「荊棘之道——兼談創辦銀鈴會的經過」で銀鈴会に言及しているが、本格的な紹介は1985年『文芸界』第16、17集で「銀鈴会『潮流』作品簡介」として『潮流』1949年春季号の作品を掲載する等、積極的に銀鈴会の存在をアピールしたことに始まったといえるだろう。元会員の林亨泰は1985年に「跨越語言一代的詩人們」¹⁷、1989年に「銀鈴会與四六学運」¹⁸、と「‘銀鈴会’史話」¹⁹を発表して戦後初期の文学活動について述懐している他、1989年「銀鈴会文学観点的探討」²⁰で会誌を詳しく検証している。『ふちぐさ』については文学的な未熟さを理由に簡単な紹介をしているだけで

あるが、『潮流』5冊については作品の分類と主な作者の文学観の検討など詳細な分析を試みて、最後に銀鈴会の特徴として次の3つを挙げている。一つ目は楊逵の指導を受けて「反帝反封建」の台湾文学の伝統を継承し、現実を見つめて理論、作品に反映させたこと、二つ目は世界の文学に常に関心を寄せ、作品や文学理論を引用、紹介をしていたこと、三つ目は銀鈴会会員が戦前戦後の政治的環境の転換と言語を乗り越えるという困難を抱えながらも文学活動を繰り広げ、空白期を埋める役割を果たしたこと、である。

更に1994年秋には林亨泰が発起人となって「台湾詩史『銀鈴会』專題研討会」と題するシンポジウムを開催し、かつての銀鈴会の会員を招集して、当時の思い出を披露すると共に、各人が保存していた資料を持ち寄り、学术界に銀鈴会の存在を印象づけた。このとき、銀鈴会関係者はそれぞれの銀鈴会に対する思いを語っている。例えば朱實は「銀鈴会同人の様々な主観的客観的要因により、銀鈴会の活動と作品について系統的で完全な紹介はほとんどされてこなかった。長い時を隔てて、銀鈴会の活動と貢献が人に知られていないことは残念なことである。」²¹と述べ、張彦勳は「台湾における新詩活動は、一般的に戦後に始まったと考えられているが、日本統治時代の台湾にすでに新詩の伝統があった。これらの誤りは台湾では戦前に新詩はなく、戦後に大陸から来た紀弦や賈子豪等が大陸から移植したとの考えによるものだ。」として銀鈴会の戦前後の新詩活動を提示、更に「銀鈴会は1942年に創設され1949年に解散するまで7、8年の長きにわたって文壇で活躍した。これは奇跡である。その存在は戦後の文学の空白期における架け橋の役割を果たし、文学的に停滞した時期の不足を補った」²²と評価している。

銀鈴会が解散に至った経緯が自主的なものでなく、更に銀鈴会解散後も張彦勳、蕭金堆、林亨泰等が逮捕投獄されて弾圧の標的にされ、銀鈴会の再結成も適わなかっただけに、銀鈴会に対する思い入れが大変深かったことは想像に難くない。しかも、更なる弾圧を回避するために、銀鈴会関連の資料のほとんどが処分されてしまった。張彦勳、林亨泰を中心とした銀鈴会関係者は残った資料をかき集め、1980年代から90年代にかけて、銀鈴会の回想記の執筆、当時の作品紹介、銀鈴会時代の作品分析等の執筆活動やシンポジウムの開催を通じ、渾身の力を込めて台湾文芸界と学术界に対し銀鈴会の再評価を求めたとと言えるだろう。

銀鈴会関係者の証言は内部の活動に詳しく、大いに参考になるが、銀鈴会会員の台湾文壇における投稿活動について言及は一応あるものの、実情については不明の部分が多い。資料のほとんどが散佚していたことがその主な原因であろう。彼らの文章が発表された1980年代半ばから90年代半ばまでの時期は戦後初期の多くの資料が発掘され研究が始まったばかりで、四、六事件についても詳しい事実は分かっていなかった。改めて、新しく発見された資料等を含め、検証しなおす必要があると筆者は考えている。

2. 研究者による銀鈴会評価

銀鈴会自体についての研究は少ないが、早期には林亨泰研究に一部言及されており、近年では「橋」の台湾新文学論争の関係者として、或いは戦後初期文学研究では楊逵に大きな影響を受けた若手文学者グループの一例という形で捉えられている。ここでは銀鈴会の関連研究について言

及しておきたい。

銀鈴会自体を研究した論文ではないが、早期に銀鈴会について言及した研究に、1994年の三木直大『『靈魂の産聲』——ある台湾詩人の日本語詩集』²³がある。同論文は林亨泰の日本語詩を考察したもので、銀鈴会に関連する記述は主に林亨泰の「銀鈴会文学観点的検討」に基づいている。三木は他にも論文「林亨泰中文詩的言語問題」では、林亨泰が「橋」に発表した詩について言語的にも十分な水準に達していたことを検証しており²⁴、更に論文「林亨泰‘現代派’詩的郷土性」において林亨泰の1950年代の現代派期作品に見える郷土性表現の源流が1947-1949年の「橋」に投稿していた時期にもあると述べて²⁵、林亨泰の文学理念について1940年代後半期の文学活動の重要性を指摘している。三木論文は林亨泰についての研究ではあるが、林亨泰の1950年代作品と文学理念の源流を1940年代後半期とする見方は、戦後第一世代の作家や詩人の多くにも共通していると考えられ、従って1940年代後半期における銀鈴会の活動に注目する必要性を示しているともいえるだろう。

銀鈴会自体を扱った論文には台湾の陳明台と阮美慧の銀鈴会についての研究報告がある。1994年秋に台湾詩史『銀鈴会』專題研討会で報告された陳明台の「清音依舊繚繞—解散後銀鈴会同人的走向」は銀鈴会解散後の元会員が台湾詩壇に及ぼした影響を考察したもので、結論には「詩史の観点から見て、筆者が特記したいのは、銀鈴会が純文学の同人結社を作っていた意義となっているのは、戦後も持続したことによる、同人の(個の、それが台湾文学全体に広がった)文学活動への影響、である」²⁶とある。陳論文が、銀鈴会解散後の会員が個々に創作活動を続けながらも、1960年代の『笠』創刊にあたっては元銀鈴会会員の林亨泰と詹冰、錦連が発起人になるなど、力を発揮したことに注目し、銀鈴会というグループ(原文:群)と“個”の相互関係に言及していることは興味深い。ただし、陳論文が目しているのは銀鈴会後の元会員による活躍であって、銀鈴会期については林亨泰の論文の引用にとどまっている。

一方、阮美慧の「“銀鈴会”的詩史位置之重估」²⁷は台湾文学史における銀鈴会の位置と笠との関係について詳細に考察したもので2001年12月に葉石濤及其同時代作家文学国際學術研討会で報告された。阮論文は銀鈴会の存在の意義は認めつつも、「文学史の視点から見ると正確に“銀鈴会”詩史(文学史)の地位を比較解読するには、具体的に銀鈴会同人の当時の作品の表現の質、それと他の同時代の文学グループとの差異或いは優越性、それが当時或いはのちの文学に影響を与えたのかどうかを示す必要がある。それによって、一つの文学団体が“文学史”に持ち得る意義が構成されるのである」²⁸と述べ、そのような視点で銀鈴会を検証した結果「前期の段階は依然として“地方”の“文学少年”の集まりに過ぎなかった」「後期の活動は“時代改変”と“言語転換”の衝撃を受けたことを除いても、彼らが早期の“文学少年”から“熱血青年”(原文:血脈青年)へと成長を遂げ、楊逵との交流のなかで影響を受け、文学の品格と表現において、時代性と現実性を重視し、同時に台湾精神意識を具えるようになった。会員の構成と活動範囲は“地方文学”の色彩が濃厚であったが、これらの青年文学者は戦後の文壇に一服の清涼な潮流をそそぎ込んだ」と評価する一方で、「銀鈴会を詩史(文学史)に改めて位置づけようとする過程で見えてきたのは、解散後の元会員が文学上の業績をあげ文学活動を続けたことにより、早期に“銀

鈴会”というグループを結成していたことが銀鈴会存在の価値となりえている、ということである」²⁹と総括している。

上述の二篇の先行研究では解散後の会員の活動内容が高く評価される一方、銀鈴会活動期についての評価はあまり高くない。但し、既論文は銀鈴会活動期の投稿活動に注目しているが、参照している一次資料は「橋」『笠』のみであることが気になる。『新生報』の文芸欄「橋」は銀鈴会会員が中国語作品の投稿を始めるきっかけになった投稿先の一つであり重要であるが、他の論文と異なり、作品そのものの質を問題にしている以上、銀鈴会の作品の全貌、楊逵と銀鈴会の関係や、会員の構成や投稿活動の範囲を知るために、『潮流』や『力行報』の文芸欄「新文藝」を参照する必要があるはずである。林亨泰、張彦勳、葉石濤等の論文を引用して補ってはいるものの、銀鈴会の活動内容を十分に把握しているとはいえない。本稿では台湾文学史における銀鈴会の位置づけにまでは言及しないが、「橋」における活動の他、『潮流』や「新文藝」における活動、楊逵との関係にも更に踏み込んで検証し、銀鈴会に対する新しい視点を提供したい。

第2節 銀鈴会と「橋」

1. 銀鈴会の結成から「橋」投稿まで

銀鈴会は台中一中の同級生、張彦勳、朱實、許世清の3名によって1942年戦時下の台湾で結成された旧制中学生中心の文学愛好者グループである。台中一中の同窓生やその兄弟、親戚、友人が主なメンバーであった。張彦勳、朱實が中心となって日本語で詩や俳句、小説や評論などを書き、会誌『ふちぐさ』として発行していた。当初は手書きのものを回覧していたが、朱實が青年学校と小学校の教師として就職後は学校のガリ版を借りて冊子として発刊するようになった。「ふちぐさ」とは朱實の命名で、「花壇の周りを囲んでいる目立たない草」のことであり、文壇を盛り立てる「ふちぐさ」になりたい、という意味が込められていたという。会員と読者、シンパは徐々に増え、1944年卒業直前には会の名称を「銀鈴会」とした。編集は張彦勳と朱實が交代で担当し、装丁はメンバーが補助してもらいながら、戦中も発刊を続けた。現存する『ふちぐさ』1945年6月20日号は戦争末期の発行であり、内容にも戦争色が濃い。会員が次々と徴兵され、戦地から軍事郵便で作品を投稿する者もいた。朱實によれば空襲の時はガリ版を持って防空壕に逃げ込んだこともあったという。この『ふちぐさ』は1942年から戦争前後の混乱期を乗り越え、光復後も続いた。

ところで、銀鈴会の会員は大きく分けて『ふちぐさ』期からの台中一中の同窓生を中心とした地元グループと、1946年秋に朱實が台北の師範学院へ入学後に加入した師範学院の学生のグループに分けられる。張彦勳、朱實は無論のこと、蕭金堆、詹明星³⁰、詹冰等は『ふちぐさ』からの会員である。特に詹冰は『潮流』1948年夏季号にも「『ふちぐさ』以来、吾人のよりよき指導者である。先輩である。『若草』で堀口大学にその詩才を認められている」とあるように、銀鈴会で唯一この時期に文壇に認められ、当時から成熟した詩を発表していた人物で、『潮流』でも会員相互の批評の重要性を唱えるなど、会員の中でも特別な存在であったようである。一方、朱

實は師範学院で積極的に文学を愛好する学生に声をかけて勧誘し、学生会員を着実に増やしていった。『潮流』の常連である林亨泰、許育誠³¹、籟亮³²、陳金河³³、張鴻飛³⁴等はいずれも師範学院の学生である。他にも本名不明の師範学院の学生が多く投稿している。筆者の調査では現存する『ふちぐさ』『潮流』には合わせて67名の投稿者がいた。

図らずも1946年10月25日に日文欄が廃止され、間もなく二・二八事件が起こり、社会情勢も急激に悪化した。銀鈴会は事件の衝撃と社会不安に加え、会員の中国語習得の必要性もあって、会そのものは存続しながらも、会報の『ふちぐさ』を停刊することになる。

2. 『新生報』の文芸欄「橋」について

『新生報』の前身は日本統治時代の『台湾新報』である。1945年10月25日、台湾新報社は台湾省行政長官公署宣伝委員会に属する新生報社に改組され、『新生報』は光復後の台湾で最も早く発行が開始された公営の日報となった。「橋」は『新生報』の文芸欄として1947年8月1日頃から1949年4月11日までの約21ヶ月間刊行され、四・六事件で関係者が逮捕投獄される中で停刊となった。

「橋」が二・二八事件後に果たした役割を考えると、主筆歌雷の存在が重要である。歌雷の本名は史習枚、上海の復旦大学出身、楊逵の代表作品「送報伏(新聞配達夫)」³⁵を読んでいた。來台後、歌雷は自らが主筆を務める『新生報』文芸欄「橋」を本省籍と外省籍の人々の架け橋とすることを願い、楊逵に度々相談を持ちかけ、「橋」主催の座談会に楊逵を引っ張り出したという³⁶。

また、歌雷は93期(1948年3月22日)の「編者・作者・読者」欄に「歓迎本省作家投稿」³⁷という見出しで、本省籍の投稿者に対し「1、国文で書いた文章について、我々は文章の修正と整理を幫助する」「2、国文では表現できない部分について、一部(或いは全文)を日本語で書いてくれば我々のスタッフが翻訳する。或いは翻訳したものを送ってくれてもよい」「3、中国語で書いた場合も、日本語の原稿を添付すれば、原稿に則して本文の内容を補正して充実させる」という3つの方法を示して投稿を促した。即ち「橋」は、本省籍の投稿者の言語状況に配慮し、翻訳という手段により作品発表の場を提供して、中国語で創作ができない本省籍作者が投稿できる条件を整えたのである。正にこの時期言語の転換期にあった林亨泰によれば、歌雷が提示した本省籍作者への優遇策は、楊逵が歌雷に提案したものであるらしい³⁸。

そして「歓迎本省作家投稿」の掲示から一週間後の29日(96期)に楊逵の「如何建立臺灣新文學」³⁹が掲載された。楊逵の論文は歌雷との協力関係のもと周到に用意されたものであった。楊逵は「我々はいま飢餓に瀕している。特に精神上的飢餓である。それは台湾文芸界が泣きも喚きもせず、死んだような静寂に陥っているからだ。もしもこのような状況が更に続けば、我々には死んで滅びる道しか無くなってしまふ。なぜ我々は押し黙ったまま死を待つのだろうか。それこそ最も悲惨なことではないのか」と述べて台湾文学界の沈黙に警鐘を鳴らした。楊逵は6箇条にわたる提言を行い、本省籍外省籍を問わず台湾の文芸関係者全体への呼びかけ、再三にわたって結束するよううながし、文学団体を結成して文芸誌や文芸新聞を発行すること、日本語作品を

中国語に翻訳して新聞の文芸欄等に掲載することを強く勧めている。これらの主張は「橋」が打ち出した優遇策と合致するものであり、沈滞した台湾文壇を活性化させるために、歌雷と楊逵が相互に協力していたことが分かる。発行部数も多く、当時からメジャーな新聞であった『新生報』の文芸欄が、本省籍作者の発表の舞台として供され、更に先輩作家である楊逵が呼びかけた影響は大きかった。更にこの時期、「橋」投稿者の一人孫達人の提案⁴⁰で「作者茶会」という座談会が台湾各地で行われ、編集者と投稿者、外省籍と本省籍の投稿者の交流の場として供された。台湾新文学論争が本格的になり、本省籍作者の投稿が積極的になるのは、この1948年3月以降のことである。

実際、「橋」という活動の場を与えられ、銀鈴会会員の一部は水を得た魚の如く投稿を開始した。作品としては林亨泰の詩「山的那邊」（「橋」第103期4月14日）、続けて詩「按摩者」（「橋」第108期4月30日）が掲載されている。また朱實が論文「本省作者的な努力與希望——新文学運動在台湾的意義」（「橋」第105期4月23日）を發表し、台湾新文学論争の論戦に加わった。これ以降『新生報』の「橋」「台湾婦女」「学生生活」「習作」といった文芸欄は銀鈴会の会員の主な投稿先となった。その後銀鈴会会員の「橋」その他における投稿活動はほぼ一年にわたり続くこととなる。新聞投稿を始めるきっかけを与えたこと、銀鈴会の活動再開のきっかけとなったこと等、この時期「橋」が銀鈴会と会員に与えた影響は大きかった。

銀鈴会会員による「橋」の作品掲載数は論文5篇、座談会記録の発言1件、詩13篇（15篇）、短編5篇を含め全部で24篇、投稿者は張彦勳、林亨泰、詹冰、蕭金堆、朱實、許育誠、籟亮の7名である。「橋」の全体から見れば、銀鈴会会員の作品は多いとはいえない。しかし、「橋」掲載の銀鈴会会員の作品には概して「台湾」を描くという姿勢が感じられ、台湾の自然を描いたものや戦後直後の台湾を描写したもの、言語転換等で苦悩する詩人の内面を描いたものなど、本省籍の作家ならではの作品が多く、インパクトのある作品もあり、それなりの存在感を示していたと思われる。

3. 投稿の開始と会誌の復刊——「橋」の影響

ところで、銀鈴会が会誌を『潮流』と改名して再刊したのは1948年のことである。1948年であることは間違いないが、詳細な『潮流』復刊時期について、張彦勳と林亨泰では主張が若干異なる。主筆の張彦勳は「停刊から一年に満たない1947年（民國36年）冬、筆者と朱實、林亨泰、詹冰、蕭翔文（筆者注：蕭金堆）、許龍深（筆者注：許育誠）等は復刊について話し合い、『ふちぐさ』を『潮流』と名を改め、1948年1月1日に冬季号を發行することを決めた」⁴¹と述べ、一方、林亨泰は「誌名を『潮流』と改名してから1948年5月に戦後第一冊目の中日文混合の銀鈴会同人季刊誌が出された」⁴²としている。

銀鈴会の活動を紹介する論文やインタビュー記録の多くは張彦勳の主張を採用している。が、筆者が確認したところ、林亨泰の主張通り、民國37年（1948年）5月1日発行の春季号が復刊第1号であることがわかった。張彦勳が誤解したのは恐らく以下のような三つの原因が重なったことによるものだろう。一つ目は張彦勳の手元に長期間『潮流』がなかったこと、二つ目は表紙

に「民國 37 年 1 月 1 日発行」と書かれた号が存在することである。しかしこれは内容を確認すれば、民國 37 年 (1948 年) 秋号から続く蕭金堆の連続小説「新生 (四)」があることや編集後記に「1949 年」とあることに気づかされる。「民國 38 年」と書くべきであったのを「民國 37 年」と書いた誤記であり、「民國 38 年」冬季号であることは明らかである。三つ目は復刊第 1 号である民國 37 年 (1948 年) 5 月 1 日発行の春季号の表紙や目次に「第一号」「創刊号」等の記載がないことである。内容をよく見れば、朱實の「再刊に際して」や「銀鈴会会則」が掲載され、「編集後記」では張彦勳が「第一号からすでに多大の声援を受けて編者としても心から喜んでいる」⁴³と述べていることから、民國 37 年 5 月 1 日発行の春季号が再刊第一号、『潮流』の創刊号であることは間違いない。実は 1964 年には張彦勳自身が「我々の“ふちぐさ”は言語の問題から 36 年 (筆者注：西暦 1947 年) に一時停刊し、翌年の 5 月に名を“潮流”と改めて復刊した」⁴⁴と述べているのである。

ところで、『潮流』が再刊された 1948 年 5 月は、1948 年 3 月 22 日に『新生報』の文芸欄「橋」で歌雷が本省籍作者に優遇策を用意して投稿を呼びかけ、3 月 29 日に楊逵が論文を発表して本省籍作者に奮起を促した時期と微妙に重なっている。再刊にあたって朱實が「かかる現状にあって文学することは大きな困難を必然的に伴ふ。わけても雑誌を出すといふことに至っては、世の賢明な人の白眼と冷笑を免れないであろう。このとき我等の銀鈴会は勇敢にも再刊の声を挙げた」⁴⁵と述べており、当時の状況を彼らは決して楽観視していなかったにもかかわらず、再刊に踏み切ったのは、楊逵の影響が大きかったと思われる。中でも、楊逵が論文で呼び掛けた 6 箇条の内の 1 条「2、真の文学関係者等が結束して自らグループを結成する。著名人を立てる必要はない。文芸誌や文芸新聞を発行し、各方面の文芸活動のニュースを紹介して、文芸の舞台とする」⁴⁶は、活動再開の時期を探っていた銀鈴会をおおいに刺激したはずである。4 月の時点で銀鈴会の会員である林亨泰や朱實が「橋」に投稿を開始していることから見ても、銀鈴会が「橋」の動静に敏感に反応していたことは確実であり、尊敬する先輩作家楊逵の呼びかけに応えるという動機が、会誌復刊の実現の大きな原動力になったと筆者は考える。そしてこの後、顧問となった楊逵は銀鈴会の『潮流』や聯誼会等の活動に自ら参与していくこととなる。

第 3 節 銀鈴会と楊逵と『力行報』文芸欄

1. 戦後初期の楊逵

戦後初期の楊逵は大陸と台湾、戦前と戦後の架け橋たる役割を自らに課していたように見える。楊逵は光復直後から『和平日報』の文芸欄「新文学」や雑誌『文化交流』の編集をして魯迅を紹介し⁴⁷、二・二八事件後も魯迅『阿Q正伝』、茅盾『大鼻子的故事』等の大陸の文学の翻訳を手がけ、日中文対訳の中国文学作品集『中国文芸叢書』(全六輯)を出版するなど、大陸の文学を台湾に紹介していた⁴⁸。

楊逵は二・二八事件後、『自由日報』に署名入りで載った記事が元で 1947 年 4 月に逮捕され、同年 8 月に釈放されている。楊逵が釈放されたのは、大陸の国共内戦の深化から、台湾入りした

新しい台湾省主席魏道明が宥和政策をとったためであったが、楊逵は釈放された直後も怯むことなく、一貫して逮捕される以前の仕事を続け、更に1948年8月より『台湾文学叢刊』（三輯で停刊）⁴⁹も発行している。

陳建忠は論文において1947年から1949年、即ち二・二八事件以降の二年間を「現実主義思潮の激しくなった時期」とし、以下の三つの視点からこの時期を分析している。即ち①日本植民地時代以来の台湾本土作家の隠退したこと、②主要な創作発表の舞台が外省籍の文学関係者に占められたこと、③台湾の新しい世代の作家が短い時間に発掘されたこと、である⁵⁰。特に①②のごく少数の例外である楊逵がこの時期の現実主義思潮を主導し、③の新しい世代の作家の育成に深く関わっていることを指摘し⁵¹、その一例として銀鈴会を挙げている。

戦後初期、楊逵は中国大陆の文学革命の伝統を台湾に伝える媒介者としての役割を一貫して果たしながら、銀鈴会の会員のような若い世代を励まし、期待をかけ、台湾の現実に向かい合った創作活動を指導するようになっていったようだ。とくに『力行報』の文芸欄「新文藝」（8月2日創刊）の主筆として迎えられ、『台湾文学叢刊』を創刊して以降、若い世代のアマチュア作家等との結びつきは強くなっていった。

楊逵が新しい世代に対して持っていた期待を当時述べた文章がある。『潮流』1948年夏季号所収の「夢と現実」⁵²である。「夢を見ることは楽しいことだ。特に此の八方塞がりの時代に生まれ合はせた青年にとっては。（中略）それでどうせ醒めねばならぬ夢なら寧ろ早く目覚めて暗黒な現実と対決し、これを克服していく——といふのが意気有る青年の役目となった。（中略）こう云ふ生活意欲と闘争意識及び此の発展過程を深く考察し表現したものが、健康にして未来多き文學である。現実と真正面に対決し、これと闘争する生活をもって銀鈴会の‘潮流’を充満し、各地の‘潮流’と合して時代を推進する大怒濤となる日の近きを私は期待してゐる。」この文章について丸川哲史は論文で「楊逵が銀鈴会のサークル誌『潮流』に書いた文章は、まさに若者を励まし、二・二八事件の挫折を乗り越え、台湾の現実と向かい合うための“新文学運動”の再提起を行っている。（中略）この文章の特徴、例えば‘どうせ醒めねばならぬ夢なら寧ろ早く目覚めて暗黒な現実と対決し’といった言葉使いには、確かに魯迅の思想的影響の影を見ることができる。楊逵の目論見には、確実に中国大陆における文学革命の伝統というものを当時の台湾の若い世代（いわゆる皇民化期に青年時代を過ごした世代）へと媒介して行こうとする姿勢があった。」⁵³と述べる。

朱實によれば、楊逵と知り合った時期は、二・二八事件後から「橋」に投稿を始める前の間であるという。楊逵の逃亡期間と逮捕期間を除いた1947年9月から1948年3月までのほぼ半年の間に二人は出会ったことになる。楊逵の知遇を得た朱實は、銀鈴会の友人を伴って楊逵宅を訪れ、楊逵の話の聞いたり、大陸の新聞や雑誌を読んだり、楊逵のもとを訪れる外省籍の文化人と交流を持ったりしていたという。戦前日本の雑誌『文学評論』で賞をとった「新聞配達夫」が日本留学していた胡風によって中国へ持ち帰られ翻訳出版されたことで楊逵は大陸でも知名度があり、台湾にきた外省籍の文化人が、楊逵のもとを度々訪れていた。そのような中で徐々に他の会員との交流も深まり、1948年夏頃に銀鈴会は楊逵を顧問に迎えた⁵⁴。

2. 銀鈴会への支援

楊逵が新しい世代の作家育成のために行った支援について、銀鈴会の場合を見ていきたい。蕭金堆は楊逵の自宅で行われた合宿の思い出を文章に綴っており、こう述懐している。「民国 37 年の夏休み、我々銀鈴会の 4-5 名の会員は楊先生のボロボロになった畳の部屋に一週間泊まった。そのとき楊先生は日本語で書いた「無医村」を教材に作文の技巧を指導してくれた。」蕭金堆等が受けた指導は以下のようなものだったという。「彼は『脚』で書くことを要求した。そしてこう述べた：想像によって書かれたものは最大公約数的な内容にしかない。『脚で』書いた作品こそ、真実の作者の個性を表現でき、それでこそ借り物でない完全に作者に属した作品となる、と」⁵⁵この時、楊逵が求めた『脚で』書く文学は作家が農村や工場へ行き、人民と身近に触れあい、実際に労働を体験して、その生活体験を書く文学であった。この合宿に参加し深い感銘を受けた蕭金堆（淡星）は許育誠（子潜）を伴って、早速「脚で」書くために、台北縣三峡の茶廠へ向かう。朱實は詩「贈一茶廠実習に出発する子潜淡星両兄よ」⁵⁶を二人に贈った。二人は一ヶ月の間茶廠で労働し、それを題材に蕭金堆は茶商の茶廠に対する汚い商売の顛末を描いた「呑蝨」⁵⁷、許育誠は自身の労働体験と茶廠の女工阿葉が貧しい生活と労働の過酷さの中で健気に生きている姿を描いた「阿葉」⁵⁸という短編を発表している。

更に、8月29日には、張彦勳が勤務している内埔国民学校の校長室において銀鈴会第一回聯誼会が行われた。このとき、楊逵と友人の高田も出席している。『銀鈴会第一回聯誼会特刊』によれば、楊逵は自己紹介を求められて以下のように述べたという。「私は一週間の南部旅行から帰ってきたばかりです。青年達が台湾新文学運動に大きな期待をもって努力しているのをひしひしと感じました。現在 40 歳以上の人は過分に消極的になっていますから、今後青年が担うべき責任は重大です。ですから私は“銀鈴会”に大きな期待をかけております。光復以来、『新知識』『文化交流』『台湾評論』が 2、3 期で停刊となってしまったように、台湾で文化関連の仕事をするのは困難です。ですから、相当の覚悟をもっていなければなりません。台湾人民の生活に密接な関係を持つ、台湾の現実を描写した作品を収録するために、私は『台湾文学』を創刊しました。私はしっかりした基礎が必要であることを確信しています。空洞の文学には貢献もありません。青年達がこの道を切り開くことを願っています」⁵⁹楊逵が若いアマチュア作家へ向ける熱い期待が感じられる言葉である。第一回聯誼会を経て発行された『潮流』1948 年秋季号には、これまでにないほど希望にあふれた内容となった。まず巻頭を飾っているのは楊逵が『潮流』に送った詩「寄《潮流》」⁶⁰「星星之火可燎原⁶¹／燒盡荆棘虎打完／潮流到處新芽萌／滿面春風光燦爛」である。林亨泰はこの詩について「ここからは彼の銀鈴会に対する並々ならぬ期待と励ましがうかがえる」と述べている⁶²。楊逵は『潮流』のメンバー達を新芽に例えて、銀鈴会の若者達に激励の言葉を贈ったのである。

楊逵が出席した聯誼会の影響は『潮流』1948 年秋季号をみれば明らかである。楊逵に創作意欲をかき立てられたと思われる論文と作品が多く寄せられている。例えば、籟亮は「文学者の使命—第一次聯誼会の後で」に「1948 年 8 月 29 日、此の日は私の一生の数多い思ひ出の大きな思ひ出となるかもしれない」と楊逵との出会いへの感動を表している。詹冰の詩「新しい座標」も

その一つと思われる。以上のように、楊逵はこの時期、銀鈴会を含め、若いアマチュア作家に対する支援活動を通じて、彼らの創作の水準を引き上げ、創作活動への意欲を蘇らせ、新しい台湾文学を共に創り上げる人材の育成を行っていた。

楊逵は自身の本拠地である台中で活動をしていた銀鈴会とは特に関係が深く行動を共にすることが多かったようである。楊逵は銀鈴会以外にも、1949年2月8日に麦浪歌詠隊が台中を訪れ公演した折に銀鈴会の朱實、林亨泰、蕭金堆等と共に『歓迎「麦浪歌詠隊」座談会』を開き、台湾各地で中国の地方民謡を歌って紹介する活動を賞賛したり⁶³、台南で『処女地』を発行していた葉石濤等を支援したりしていた。楊逵の活動の背景に、銀鈴会やその他の若いアマチュア作家との相互協力があったことは、1940年代後半の文学を考えるための重要な事実である。

3. 『力行報』文芸欄「力行」「新文藝」と銀鈴会の投稿

ところで、楊逵が主筆を務めた『力行報』の文芸欄「新文藝」は銀鈴会会員の投稿先の一つであったが、実は『力行報』については詳しいことは分かっていない。『力行報』は1947年11月12日に台中で創刊された新聞で、停刊の時期は不明である。発行者は「青年軍臺中聯誼會」とある。『新生報』と比べ小さな地方新聞であったのだろう。

『力行報』の文芸欄について、筆者が確認できたのは1947年11月15日から1948年11月17日までの二種類の文芸欄「力行」（第1期から第190期）「新文藝」（第1期から第20期）である。

（ただし、この期間についても一部欠刊がある）日を追って見ていくと、「力行」の創刊は1947年11月15日で、第1期から第85期までは3日刊、第86期（1948年8月1日刊）以降日刊となっており、一方「新文藝」は創刊が1948年8月2日で、第1期から第13期（1948年10月22日刊）までが週刊、第14期（1948年10月24日刊）以降は3日刊となっている。

『力行報』の社長である張友繩は「私と私の新聞」⁶⁴という記事でこう述べている。「他の新聞は金持ちが金を払ってくれる、これが寄付だ。しかし我々には誰も金を払ってくれない、ただ我々の心血で賄うばかりである。人々は私の新聞のことを土匪が経営していると罵る。そうだ、私は社会大衆の利益の為に少数の人間のご機嫌を損ねている。土匪の名の由来がこのことであるなら、私は一部成功したといえるだろう。（後略）」社長自らが「土匪」の悪名を甘んじて受けても社会大衆のために新聞を発行すると公言しているのである。この経営方針が果たして貫かれたのか、筆者は把握していないが、当時の政治状況から考えれば、相当困難であったに違いない。

また、文芸欄の編集方針を左右する主筆について「新文藝」は創刊号から楊逵の署名が諸処に見られ、楊逵が主筆であることが明確であるが、「力行」は『力行報』創刊直後からの文芸欄であるにもかかわらず、主筆については署名に「編者」とのみ書かれ、主筆の氏名は不明である⁶⁵。

この「力行」の主筆によれば『力行報』の「児童園地」「力行」「新文藝」という3つの文芸欄には以下のような特徴があった。

「児童園地」「力行」「新文藝」は三位一体である。（中略）「児童園地」は子供（原文：小讀者）の作品を載せ、「力行」は総合的なもので悪趣味ものや強烈な桃色（黄色＝原文）の文学

を極力避け、青年の作品と現実社会を反映した文章を受け入れた。「新文藝」はできる限り深く現実社会を反映した文学作品を紹介することで、読者が作品に共鳴し、更には思想的な啓蒙に至り、更に進んで自覚させる力量をもたせ、積極的に社会全体の前進を推進させるものである⁶⁶。

ここで述べられている3つの文芸欄の内、「児童園地」については投稿者が子供と明言されていることから、二〇歳代の会員がほとんどであった銀鈴会の投稿先にはなりえない。実際に作品の掲載も確認できなかった。そこで重要になるのが「力行」と「新文藝」の編集方針の違いである。「力行」は幅広く文学性の高い作品を受け入れているのに対し、「新文藝」はむしろ現実社会を描く作品に特化させていたことが分かる。こうして見ると、「力行」は一般的な文芸欄であり、「新文藝」は主筆である楊逵の目的意識が明確に反映された有る意味特殊な文芸欄であったといえるだろう。

中でも、「新文藝」は楊逵にとって、新しい台湾文学作品創出への試みを行う舞台であった。楊逵は現実を作品に反映させる文学の投稿を、楊逵は「新文藝」で繰り返し呼びかけていた。「新文藝」に毎号載っている原稿募集の言葉は次のようなものである。「投稿を歓迎する：各種の投稿を歓迎する。内容のない空洞の美文は不要である。台湾の現実を反映し、台湾人民の生活や感情思想動向を表現した報告性のある文章を特に歓迎する。 楊逵」このような現実を反映させる文学の提唱は、台湾の日本植民地時代からの現実主義文学を引き継ぐものであるが、一方で大陸から来た文芸関係者には文芸大衆化運動の文芸形式の一つとして推進された報告文学を想起させたであろう。

さて、筆者の調査では銀鈴会会員の作品が「力行」には56篇、「新文藝」には20篇掲載されていたことが分かっている。二つの文芸欄を合わせると、8月以降の『力行報』にはほぼ毎号銀鈴会会員の作品が掲載されている。「力行」の投稿者は金秋⁶⁷、張彦勳、朱實、蕭金堆、張有義⁶⁸、春秋（朱商秋）、松翠（張鴻飛）、殘塢（本名不明）、林亨泰、詹冰、素吟（陳素吟）の11名であり、中でも際だって多く掲載されているのは金秋の作品で13篇ある。一方、「新文藝」の投稿者は朱實、金秋、蕭金堆、許育誠、張彦勳、張有義の6名で、際だって多いのが蕭金堆の作品である。蕭金堆は銀鈴会で最も強く楊逵の影響を受けた人物であり、短編小説作品に色濃く反映されている。

「力行」で金秋以外の会員の投稿が始まるのは8月に入ってからで「新文藝」創刊の時期と重なる。従って、金秋を除く銀鈴会会員の「力行」「新文藝」への投稿開始には、楊逵と銀鈴会の関係が背景にあったことは間違いない。但し、投稿開始後は、楊逵が会誌『潮流』に掲載された作品の中から良いものを推薦する等の仲介を行うといったことはなかったようである。筆者が朱實に直接確認したところ、「橋」は完全な自由投稿であり、一方「力行」と「新文藝」投稿については自由投稿の他に編集者の依頼で投稿することもあったという。『新生報』の文芸欄である「橋」は全国から投稿が集まるが、『力行報』は小さい新聞で「力行」「新文藝」共に投稿が少なかったため、編集者が時々朱實等のもとを訪れ、朱實等は編集者の依頼で『潮流』の作品を推薦

したり、作者本人に連絡して投稿させたりということがたびたび行われていたらしい。『力行報』の文芸欄に銀鈴会が占める比重が大きい理由はそのあたりにあったようだ。

4. 銀鈴会の解散と楊逵の逮捕——四. 六事件

1949年に入ると、会員の投稿活動はますます盛んになった。『潮流』1949年春季号では、銀鈴会内部では現実を重視する会員と芸術を重視する会員とで意見が分かれ論争も行われ、会員同士が互いの作品を評価しあう評論活動も活発になっていた。前途洋々であるかに見えた銀鈴会と会員個人の文学活動の前に立ちふさがったのが、四. 六事件であった。四. 六事件とは、大陸の国共内戦における敗北が決定的になり、生き残りを賭けて遷台を決めた政府当局が台湾の反体制勢力を一掃するために、陳誠の命令で学生運動のリーダーや台湾文壇の文化人を一斉逮捕した事件であり、これが白色テロの始まりとなった。

四. 六事件に至る経緯を振り返ってみる⁶⁹。1947年以来、師範学院の公費学生が待遇改善を訴える行動は度々あったものの、学生運動に結びつく動きではなかった。学生運動に関わる動きは上海で学生運動が鎮圧された「五. 二〇惨案」⁷⁰から一年以上後の1948年秋頃から学生が組織する社団活動の中で徐々に広がっていき、決定的になったのは1949年3月以降である。1949年3月19日、台湾大学と師範学院の学生が単車に二人乗りしていたところを警察の取り締まりに遭い、些細なことで言い争いになり拘留された。翌日、警察の横暴なやり方に抗議して両大学の自治会が組織した数百人（5、6百人）の学生が大挙して押しかけ、警察署を取り囲んで釈放を求めた。このときの学生等が前年の大陸での学生運動と同じスローガン「反飢餓、反内戦、反迫害」を唱えてデモ行進したり、市内循環のバスに大きく書いたりしたことで、事件は単なる抗議活動から大陸の情勢を意識した学生運動へと発展していったのである。その後3月29日、台湾大学と師範学院の自治会の呼びかけに応じ、台北の大学はもちろん、台湾各地の大学の代表、台北の中学生も集まって、台湾大学法学院の運動場で盛大なキャンプファイヤーが行われ、民謡や抗日歌などを合唱した。朱實は師範学院自治会の学術部長で、学生運動のリーダーの一人として積極的に関わっていた。このとき、5月4日に大規模な抗議活動をすることを学生間で申し合わせたという。これらの活動が反体制であるとみなされたのであろう。

更に学生と共に標的にされたのが楊逵とその周辺の外省籍の文化人等である。決定的なきっかけは楊逵の「和平宣言」であったと思われる。楊逵は『新生報』やその他の文化人とともに文化界聯誼会を組織し、本省籍と外省籍の人々の間の溝を埋めようと考えていた。そのための文章として、友人達から起草を頼まれたのが「和平宣言」であり、本来は台湾在住の文化人の連署によって発表されるはずであった。ところが、楊逵が書き上げた原稿を外省籍の友人に送ったところ、『大公報』の記者が、その中の一人「橋」の主筆歌雷を訪ねたときにこの原稿を見て、そのまま『大公報』に署名入りで載せてしまう。これが国民党政府の台湾省主席として赴任したばかりの陳誠の怒りを買って、楊逵や周辺の文化人の逮捕につながった。4月6日、楊逵や「橋」主筆歌雷を含む関係者の多くが逮捕投獄され、「橋」は4月11日に停刊に追い込まれる。

指名手配書には朱實の名前もあった。指名手配書には理由として「銀鈴会発刊の『潮流』主筆、

言論が反動、思想が左傾」⁷¹とある。実際には『潮流』主筆は張彦勳であるが、朱實は銀鈴会『潮流』主筆として言論活動が左傾であると見なされ指名手配されたのであり、銀鈴会自体が反動的左翼的な団体と誤解されて標的になった可能性を示している。

この四・六事件で銀鈴会は朱實と楊遠を失い、作品発表の場も失った。四・六事件直後、銀鈴会はまだ活動を続けていたようである。銀鈴会は1949年4月15日に林亨泰の日本語詩集『靈魂の産聲』⁷²を出版しており、この出版に奔走した朱實は指名手配中であつたことから、「辰光」という筆名で本の扉を書いている。月報『潮流』1949年5月1日号も現存しているが、『潮流』の停刊を示す告示等はない。

張彦勳は、銀鈴会が解散に至った具体的な経緯や詳細な日付は述べていないが、3つの原因を挙げている。「一つ目は国民政府がこの文学グループを共産党の外部組織と誤解して迫害したこと。会長と主筆を兼ねていた筆者自身、しばしばその弾圧を受けた。二つ目は白色テロが全島に広がり、筆者は1950年(民国39年)より数回にわたり逮捕された。銀鈴会の同人も多くが入獄している。三つ目は言語問題が同人を困惑させ、一時はその障害を突破できぬままに終わったものの、将来の為により広い領域を求め、苦心して中文をマスターしようとした」⁷³張彦勳の述べる原因からは、会員を集めて解散を宣言したのではなかったらしい、ことが読み取れる。創作を発表する場もなくなり、中核メンバーであつた朱實が去り、顧問の楊遠が逮捕され、白色テロの嵐の中で主筆の張彦勳、主要メンバーの林亨泰や蕭金堆も逮捕され⁷⁴、『潮流』の購読者というだけで警察によれば事情を聞かれるということがあり、更に籍亮が銃殺されるという極限の状況で、活動停止を余儀なくされ、解散に至つたと考えるのが妥当であろう。

第4節 銀鈴会会員の投稿活動

1. 言語転換と翻訳

銀鈴会会員の投稿活動の舞台となつた「橋」「新文藝」等では、中国語ができない本省籍の投稿者の為に翻訳者を用意して、日本語による投稿を受け入れていた。従つてこの時期新聞に発表された本省籍の投稿者による中国語作品を見ると、言語の習熟度の問題と翻訳を経て発表されたということを念頭に置く必要がある。銀鈴会会員は、日本統治下で厳しい皇民化教育を受けた世代であり、1945年の終戦当時、会員は全く中国語ができなかつた。終戦時、ほぼ成年に達した彼らが新たな言語として中国語を習得するために払つた努力は並大抵でなかつたことは、幾多の回想記で述べられている。1948年4月に「橋」へ投稿を始めた当初、日本語の原稿を投稿して編集者側が翻訳したり、個人的に中国語の分かる人に翻訳してもらつたものを投稿したりして、1948年夏から秋頃になると、師範学院の学生だつた林亨泰や蕭金堆、朱實、許育誠等は、中国語学習途上ながらも、日本語で書いた詩を自ら翻訳或いは始めから中国語で作詩したものを、外省籍の同級生に見て貰つて投稿するようになっていったようである。学生の会員は日頃から中国語で授業を受け、外省籍の学生と交流を持ち、図書館等で中国語学習に専念できたことから、中国語を学習する上で比較的環境に恵まれていたといえる。一方、学校の教師や銀行員、薬剤師

など仕事を持ちながら、創作活動をしていた張彦勳、詹冰等が中国語で創作を始めるのは 1950 年代後半以降のことである。銀鈴会では、先に中国語を習得したものが、未習得の会員の作品を翻訳する、ということが行われていたようである。

当時翻訳を担当したのはほとんどが学生であり、翻訳の水準は率直に言ってあまり高くなかった。これは当時の状況を考えれば仕方がないことではある。文学作品を本来の持ち味を生かして訳すのは熟練した翻訳者でも難しい。中国語による公教育を受けた後の世代が、当時の新聞等に掲載された中国語作品を見たときに、言語的な未熟さを感じたとすれば、それは無理もないことである。

翻訳という手段を強く勧めたのは楊逵であり、本省籍作者の作品を世に出す、という意味で大きな役割を果たした。但し、翻訳はあくまでも、作者自身の手で翻訳するか、更に進んで作者が始めから中国語で作詩するようになるまでの言語転換の過渡期を乗り切るための苦肉の策であった。四・六事件に始まる白色テロがなければ、当時文壇に投稿していた本省籍作者の言語運用能力は大きく向上し、例えば林亨泰が中国語に成熟した後に改めて自作品を自ら翻訳をしたり、台湾語に翻訳したり、日本語の音を作品に取り入れる等の試みをしているように、本省籍作者ならではの様々な試みが新聞雑誌等のメディアを通じても広範に行われていったに違いない。

戦後初期の作品を考える際には、この時期の本省籍作者の多くの作品が未成熟な言語能力、或いは未熟な翻訳を経て発表され、受け手の本省籍読者も未熟な語学力を操りながら読んでいたことを勘案するべきであると思う。また、言語的な面は未熟でも、この時期だからこそ書き得た作品が多くあるはずである。

そこで以下では戦後初期という時代を映し出している銀鈴会会員の作品を一部紹介する。一つは楊逵の直接の指導のもと生まれた「実在的故事」を始めとする短編小説、もう一つは新聞に掲載された銀鈴会会員の詩の中から、台湾の暗い現実を描いた詩、詩人の内面を描いた詩について取り上げる。

2. 「新文藝」における「実在の故事」の誕生と実践

銀鈴会会員が直接的に楊逵の指導と影響を受けたのは短編小説の分野である。具体的には夏の合宿における直接指導、そして以下で紹介する『力行報』の文芸欄「新文藝」で行われた「実在的故事」の募集である。

楊逵は「橋」や「新文藝」、座談会等で現実を反映した創作の実践を繰り返し促していた。「新文藝」主催で8月14日に行われた第一次新文藝座談会⁷⁵では、台湾新文学運動について「更に一歩進めなくてはならない」とし、「抽象的玄学式理論にとらわれてはならない」「我々の血と熱をそそぎ込んで推進するべきである」と述べている。更に創作態度においては「台湾の新文学は少人数のものではなく、大衆のものとするべきだと考えている。」として、台湾新文学論争の問題点を指摘し、一方、文藝性のある集会の必要性、或いは土白語（地方語）の運用などに言及して、創作の実践の方向性を示している。

創作の実践を加速するために作品を募集することを思いついたようだ。その試みの一つが「徴

求『実在的故事』(『新文藝』第8期 1948年9月20日)⁷⁶である。楊逵が募集した原稿は以下のようなものである。「我々が日常生活において見聞きしたこと全て、我々を感動させ、喜ばせ、憤慨させ、傷心させた出来事について、我々がその発端、経過、結末を詳細に観察し記録したもの——これを「実在的故事」と言い、我々の心を動かしたこの出来事を、もしも上手く書ければ読者を感動させることができるはずである」この「実在的故事」の興味深い点は、作品を実際に募集したことである。それまでの楊逵は現実を反映した文学作品を、「橋」の台湾文学論争や「新文藝」でも繰り返し求めてきたが、論争にはなっても創作の実践にはあまり結びつかなかったことが頭にあったのだろう。そこで、テーマを絞って募集をかけることで、現実を反映した創作の実践に結びつけることを意図していたと思われる。

この「実在的故事」誕生の経緯について、横地剛の論文⁷⁷によれば、「“実在的故事”は香港の『大衆文藝叢刊』(邵荃麟、馮乃超編)を基に誕生した。〈新文藝〉の第8期と9期は同誌から適夷の‘林湖大隊’を転載しており、これを裏付けている。」とある。横地論文は更に楊逵の提唱した「実在的故事」と『大衆文藝叢刊』の「実在的故事」との違いにも注目し「『大衆文藝叢刊』の編者は“現在の人民の闘争を迅速に反映する短小の文学形式”としている。楊逵は募集に際して“取材と表現上、このような客観性と真剣な態度を採ることこそ『新文藝』の出路であり、文藝大衆化の近道でもある”と述べ、“ありのまま”を描く有効な形式と考えたようだ。」と述べ、香港の『大衆文藝叢刊』の編者と楊逵は同じ「実在的故事」という言葉を用いてはいても、その目的とするところが大きく異なることを指摘している。楊逵が「徴求『実在的故事』」で求めた「実在的故事」は個人の体験報告であり、台湾の伝統的な現実主義文学とも、いわゆる報告文学とも、少しニュアンスの違うものではあるが、元々彼が提唱していた「現実を描く文学」への道標として考えられたようである。

「実在的故事」の創作の実践については、「実在的故事特輯」(『新文藝』第11期 1948年10月11日)が生まれ、楊逵に認められた最初の「実在的故事」2篇が掲載された。その内の1篇が、銀鈴会の蕭金堆の「兩個世界(二つの世界)」(『新文藝』第11期 1948年10月11日)である。これは蕭金堆が実際に体験したエピソードを書いたものである。

さて、題名の二つの世界とは天国と地獄の意味である。内容は以下の通りである。嘉義市の東の丘陵には中学校の運動場と監獄の農場があり、運動場でバレーボールを楽しんでいた僕はそこで囚人の団体と遭遇する。運動を楽しむ自由な僕に向けられる、足と首に鉄の鎖をつけられて整列している囚人達の羨望、嫉妬、憎悪、絶望の眼差しに、僕は愕然とする。そしてこう考えるのである。「一方は天国でもう一方は地獄だ、一方は自由の占有者で一方は自由の飢餓者だ。ああ、なぜ人間界にはこれほどまでに残酷な対照的なものがあるだろうか」⁷⁸

この作品は楊逵自身が選んだはずであるが、楊逵は「“実在的故事”問答」⁷⁹で「まだ我々の満足できる作品とはいえない」と述べている。「空疎な内容でもなく現実を反映しており、しかも作者の体験を書き、その場の感傷的な感情も描けている」としながらも、「感傷的過ぎて、浅薄で、科学的な精神に欠けている」「作者が第三者として傍観しているだけではなく、もう一步深入りしてよく観察し、来歴などを考察してこそ、作者と作中人物との間に血縁関係が生じる

のだ」と指摘し、創作の態度のあり方やストーリー展開の技法について述べている。選者というよりは指導者的な見方である。

蕭金堆はこの後も「芥川比呂志中尉」⁸⁰等、「実在的故事」の創作に挑んでいる。「芥川比呂志中尉」は日本敗戦直後の軍隊における自身の体験を綴った作品である。芥川比呂志は芥川龍之介の長男で日本の演劇人として著名な実在の人物で、当時彼の上官であった。作品では粗暴な日本の軍人達と敗戦による軍隊内の混乱を描写しながら、一方それとは対照的に敗戦の理由を冷静に分析する芥川比呂志の姿を通して、日本帝国主義の矛盾と崩壊を描いている。特に粗暴で無教養な日本の軍人等に対する軽蔑と、教養ある文化人の芥川比呂志に対する尊敬とが随所に見られるのは、本省籍作者ならではの視点であるといえるだろう。丸川哲史はこの作品の重要性を「皇民化期を通過し、日本人として参戦させられた筆者、蕭翔文（筆者注：蕭金堆）が、まさに自らの手で脱皇民化を果たそうとしていることである」⁸¹と述べる。確かに、皇民化教育を受けた世代で軍隊に自ら志願して入隊した蕭金堆が、この作品の中で、単なる日本批判に終始せず、また感傷的になることなく、冷静に軍隊内部の混乱を観察し日本の敗因を分析している。蕭金堆は会誌『潮流』においても「新生」という日本敗戦と台湾光復を体験した若者を描いた連載小説を発表しているが、そこでも回を追うごとに感傷が排除され、軍隊内部の腐敗と台湾人に対する強烈な差別の存在を描くなど、冷静な観察と考察が見られるようになる。蕭金堆は「実在的故事」の創作を通して、楊逵の具体的な指導を受けることにより、成長を遂げたのである。

他にも許育誠の「黄昏的脈膊」⁸²は大学生の彼自身が体験した大学生活や友人の恋愛や青春を描いた内容で「実在的故事」を念頭に書いた作品の可能性もある。「実在的故事」については未発見の作品のタイトルの中にも、張彦勳の短編「校務會議」などそれらしいものがある。

3. 銀鈴会の詩——彼らが見た台湾の現実と自身の内面

銀鈴会の詩については、楊逵の影響は主に精神的な部分であったようである。林亨泰は筆者への書信の中で「戦後の銀鈴会の活動は楊逵先生の訴えようとする“社会正義”の精神に影響を受け、また一方、詹冰先生のもちえた“詩のレベル”を方法として文学の出発を試みようとしていたものと思われます」⁸³と述べている。政治的に厳しい状況下、楊逵は若いアマチュア作家に大きな期待をかけ、将来への希望をもたせ、その一方で、台湾の現実を踏まえた創作をするよう促した。

投稿開始直後、多く見られるのが、当時の社会問題や銀鈴会の会員が体制に対して抱いていた反感を反映した詩の数々である。彼らが描く台湾の暗い現実には、例えば、林亨泰の「按摩者」⁸⁴は歓楽街で働く女性や遊び疲れたやりたい放題の金持ちに按摩をする盲目のマッサージ師を描いた、台湾の暗い世相を表した詩である。続いて発表した詩「靈魂的秋天」⁸⁵も、美しい夢の崩壊と、金持ちばかりが楽しみ、善良な人々が苦しんでいる、社会の凋落と矛盾を描いている。

また、朱實の「酒家女」は社会の混乱の中でホステスになった女性の悲哀を描き、当時の社会問題を映した作品であり、張紅夢「葬列」⁸⁶は伝統的で仰々しい葬式の様子を描写しつつ、最後に詩人は「哦,中華,我的祖國!/我為你憂慮/人們仍然還遵循着/這個樣式的葬列/有一天,你會/衰老,頹

廢而被葬送 (おゝ、祖国中華よ。この様な葬式のある限り/わたくしは愁ふ。/やがての日——□然と現はれるであらう/あなたの老衰と頽廢とを…。)」と憂える。詩人は「祖国中華」の「老衰と頽廢」を憂慮している。

一方、山奥に住む少数民族等、より台湾らしい存在に対する憧憬や賞賛し、その対極にある都市の社会問題を提起している詩もある。例えば、朱實の詩「烏來頌」⁸⁷は大学の遠足で烏來の村を訪れたときの詩で、タイヤル族の人々の純朴さが描かれるが、最後に「人們雖然貧窮/但沒有一個乞丐!/也沒有一個餓死!(彼らは貧しくはあるが/乞食は一人もなく/餓死する者も一人もない)」と締めくくられる。実際のところ、当時のタイヤル族の人々が理想的な生活を営んでいたかどうかは分からないが、様々な社会問題を抱える都会とは対照的な、山奥に住むタイヤル族の生活は、詩人には理想郷のように見えたのであろう。

いずれも、露骨な体制批判ではないが、台湾社会の矛盾を浮き彫りにした内容である。このような台湾の暗い現実を描く詩は投稿開始直後に多く見られるが、楊逵を顧問に迎えた頃から減少し、むしろ、台湾の文学の将来に期待を抱く内容に変化していく。

暗い現実を描く詩と並んで、「橋」掲載の銀鈴会会員の詩に特徴的なのが詩人の内なる決意や内面を描いた詩である。単なる希望に溢れた明るい内容ではなく、むしろ大きな困難を克服しなければならない苦渋に満ちあふれつつ、それでも未来に向かって敢然と進もうとする詩人の内なる決意が見える。

例えば、朱實は「蜃伏」⁸⁸ (日本語原詩は『潮流』1948年夏季号「屈する者」/「橋」第103期1948年9月22日)を發表している。「□更大的飛躍 忍受暫時的蜃伏!/甘受着 所有的 白眼 冷笑!/反抗着 一切的 誘惑、恐嚇!(伸びんがため、より偉大な飛躍のため、屈縮しよう!/あらゆる白眼と冷笑を甘受しよう!/全ての誘惑と恐脅を排除しよう!)」というもので、詩人の意気込みと目下の困難を乗り越えようとする気概が感じ取れる。詹冰の詩「新的座標」(日本語原詩は『潮流』1948年秋季号「新しい坐標」/「橋」187期1948年11月22日)もその一つである。「啊!在新的坐標/等到結美麗的果實/我啊!將從這裏起步。(あゝこの新しい座標で/美しい果実がみのるまで/私は一步も踏み出してはいけない)」⁸⁹という言葉は、台湾の新しい文学に貢献したいと願う若い詩人の志を表現しているように思われる。詹冰は後に台湾現実主義詩の先駆者と称され、台湾詩壇で活躍していくこととなる。更に張紅夢の「墻壁・時鐘」の「墻壁」⁹⁰がある。

「一醒起來/今天依然聳着的白壁/巨大的屏風/哦…/裂開你的皮膚/穿鑿你的骨肉/我必須鑽進去(眼を醒せば/今日も悠然と立って居る白い壁、/巨大な屏風!/おゝ/お前のその白い皮膚を裂き、/骨肉を穿って、/私は潜り抜けなければならない。)」は朱實や詹冰以上に、強い決意を表明している。

朱實が「屈縮」し「白眼と冷笑を甘受」してまで目指すもの、詹冰が「美しい果実が実るまで」「私は一步も踏み出してはならない」と述べる「美しい果実」、張紅夢が「お前のその白い皮膚を裂き」「骨肉を穿って」まで「潜り抜けなければならない」と述べる「壁」、それは彼らが当時抱えていた言語の壁であり、目標とする台湾新文学の創出という厚い壁であったのだろう。抽象的ではあるが、当時の若い詩人が直面していた厳しい状況とそれを乗り越えようとする強い意志が見える。

他にも、内面世界を描いた林亨泰の詩が3篇ある。発表順にその変化を見てみたい。最も早く掲載された「山的那邊」は、「麗梅」「我」の2篇の詩により構成されている。「麗梅」⁹¹は「麗梅嗎?麗梅就是/屬於你的!/你這樣的唱完、而微笑着/可是你到底是屬於誰呢?/因為你是烏來村的姑娘 (“リームイは、リームイは、それはあなたのもの!” /かく歌い終ってニコリ微笑んだが/君は本当に誰のもの/君はウライ村の乙女なれば)」「麗梅」は「リームイ」という台湾の山奥に住む少数民族ウライ族の女性である。彼女は実に生き生きと描かれている。一方「我」⁹²では「我從城市裏來/在這山裏坳找到百合/可是…/我又為了城市的因襲/棄掉了這山坳的百合(僕は文明人の神経で/またこの山奥の百合を捨てた)」として、文明人である「僕」(おそらく詩人自身)を自嘲的に捉えている。2篇の詩は対照的で、より台湾の風土に近いものへの肯定的な態度と、文明に毒された自分自身への否定的な態度に気がつく。それからしばらく時間をおいて発表された「新路」⁹³では詩に描かれる詩人自身の姿に変化が見られる。特に「從前不時流着淚/像日本少女的脆弱的眼睛/而今,眼睛的最深奧/有着一把嚴肅的火炬在燃燒(以前は度々涙を流していた/まるで日本の少女のか弱い目のように/しかし今、目の奥深くには/嚴肅な松明が燃えている)」という詩句は、かつての脆弱であった自分と決別し、新しい台湾文学を築くという目的を見だし強い決意を持つに至った彼自身の姿と重なる。更に2月に掲載された「歸來」⁹⁴には「歸人呀!/從遼遠得流浪悲慘歸來/在暫借的樓房/在暫借的燈下/用借來的筆/用借來的紙/你還能寫什麼?(帰れよ/遙かなる放浪の悲しみより帰れ/借りた家/借りてきた灯火の下で/借り物のペンと/借り物の紙で/あなたは何か書けるといふのだ)」とあり、これは林亨泰の文壇を離れ沈黙を守る作家等へ向ける力強い呼びかけとも取れる。「橋」投稿当初発表した「山の彼方」の「我」の自嘲的だった詩人が、「新路」では揺るぎない決意を持ち、さらに「歸來」では他の詩人に創作の再開を呼びかけるに至ったのである。一年間という短い間に起きた林亨泰の内面の変化はこれほどに大きかった。林亨泰は銀鈴会解散後も文学活動を継続し、台湾詩壇で大いに活躍することになる。

銀鈴会の会員の詩については、新聞に発表された時期と実際に詩作した時期に、時間差があるので、詩作の時期に近いと思われる『潮流』発表の時期で見ると、夏頃を境に銀鈴会会員の詩に大きい変化が見られる。先に述べた楊逵の影響を受け始めた時期と重なる。この時期に楊逵に激励され立ち上がったことは、林亨泰を始め、戦後第一世代の詩人、作家にとって大きな転機となったと考えられる。

おわりにかえて

銀鈴会会員は二、二八事件後の政治的に厳しい状況下で、言語の壁に苦しみながらも、勇気を奮い起こして投稿活動を行っていた。『新生報』の文芸欄「橋」の主筆歌雷と楊逵の呼びかけに銀鈴会会員はいち早く反応して投稿を始めた。「橋」上の台湾新文学論争には二名の会員が議論に参加している。『新生報』はメジャーな新聞で投稿者も必然的に多く、編集者側が求める水準も高かったと思われ、実際「橋」における銀鈴会会員の投稿作品は総体的には多いとはいえないが、掲載された詩や短編は一定の水準に達しており、内容的にも本省籍の投稿者ならでの視点

が見られる。一方、『力行報』の文芸欄「新文藝」は現実を反映する文学にテーマを絞っていたこともあって、楊逵の指導のもと創作の技巧を磨く絶好の修行の場として機能していた。楊逵が募集した「実在的故事」に応じた蕭金堆など、楊逵の指導と励ましを受けながら成長していった。他方「力行」はより広範な題材の作品を受け入れており、作品の水準も様々であるが、編集者が銀鈴会に作品の推薦を依頼するという密接な関係もあって、銀鈴会会員にとっては身近な投稿先であり、投稿者を必要としていた「力行」の編集者側にとっても、銀鈴会は欠かせない存在であったと思われる。

作品全体について、彼らの当時の作品は言語的的技巧的に未成熟な面もあるが、彼らは文学をするにはあまりにも厳しい政治的な状況を認識しつつ、当時でなければ描けない様々な台湾の暗い現実を捉えた作品を発表している。また、当時の文章や詩からは、意識的に台湾文壇の活性化を促し、台湾の新しい文学に貢献しようとしていた志を垣間見ることが出来る。一部の会員は、楊逵の指導を受けながら、台湾の現実を反映した文学の実践に取り組むなど、意欲的に創作活動を行っていた。

銀鈴会会員の投稿活動は楊逵に大いに支えられていた。戦後初期、特に二・二八事件後の台湾文壇で突出した役割を果たしたのが作家楊逵であった。楊逵は創作活動の傍ら、外省籍の文化人と積極的に交流し協力して、「橋」で台湾文壇の活性化を呼びかけ、「新文藝」では創作を発表する場を提供し、一方で銀鈴会を始めとする若い世代のアマチュア作家に期待をかけて創作の技巧を指導し、その彼らと手を携えて、台湾の現実を描く文学を創りだそうと努め、民謡を重視し、文藝活動をしている個人や団体への応援を惜しまなかった。また、『中国文学叢書』に見られるように翻訳を通じて中国文学を積極的に紹介し、特に楊逵が主筆を務める『力行報』の文芸欄「新文藝」は大陸の文学から「実在的故事」を取り入れて台湾文学の中に生かそうと試みた。更に「実在的故事」で作品を募集し選んだ作品に率直で厳しい助言をするなど、後進を育成するための試みが行われていた。このような具体的な活動を行うことで、楊逵は台湾文壇で戦前と戦後、大陸と台湾の架け橋的な役割を果たそうとした。銀鈴会も楊逵の指導を受けて、日本植民地時代から台湾文学界が培ってきた現実主義文学の伝統を継承していったのである。

銀鈴会会員が台湾文壇で活躍した1948年3月から1949年3月という約一年間は、詩人、作家として十分な実力をつけるには、あまりにも短い時間であったが、自力で文壇において活躍するために必要な力を獲得したようである。四・六事件に始まる白色テロは、楊逵が戦後初期の文化活動を経て創りだした様々な可能性を踏みにじるものであった。それでも、楊逵が育てた若者達は自力で文壇に登場する努力を続けた。

『新生報』の「橋」、『力行報』の「力行」「新文藝」等、銀鈴会会員の投稿活動の舞台は、楊逵と「橋」の主筆歌雷等外省籍文化人によって用意されたものであったが、1949年、会員は銀鈴会や師範学院を基盤に更に大きく成長しようとしていた。例えば、師範学院台語戲劇社発行の『龍安文藝』創刊号がある。師範学院の社团台語戲劇社の蔡徳本が中心となって企画したこの雑誌は銀鈴会会員である朱實や林亨泰、許育誠、蕭金堆、同じ師範学院の学生で「橋」に度々投稿していた林曙光、黄昆彬等とともに関わっている。創刊号の目次には作家で文学研究者でもあり

当時台湾大学教授であった黎烈文、日本植民地時代からの作家龍瑛宗、「橋」の主筆歌雷、作家で当時師範学院教授であった謝冰瑩など当代一流の文化人が名を連ねている。奥付には1949年5月2日発行とあるが、四・六事件で執筆者の多くが指名手配を受け、逮捕されたために、蔡徳本は刷り上がってきた雑誌を無念の思いで焼き捨てたそうである⁹⁵。銀鈴会解散後に最も早く認められたのは林亨泰であった。1955年秋に詩刊『現代詩』に符號詩「輪子」を投稿して主筆の紀弦の目にとまり、これをきっかけに「現代派」が誕生することになる。更に1964年6月には銀鈴会元会員の林亨泰、詹冰、錦連を含む12名の発起人で詩刊『笠』を創刊した。林亨泰が初代の主筆を務めた関係もあって、この期間には銀鈴会元会員の存在感が比較的大きかったようである。言語的に外省籍詩人に劣る本省籍詩人の多くは『笠』によって常時作品を発表する場を獲得した。『笠』は現在も続いて発行されている。このような文学活動を続ける中で、銀鈴会会員の林亨泰、張彦勳、詹冰、錦連、蕭金堆は詩人、小説家として数々の賞⁹⁶を獲得するなど台湾文壇で認められていった。

銀鈴会会員の投稿活動とその背景を概観する中で再認識したのは、1948年4月から四・六事件までの約一年間は、駆け出しの詩人、作家であった銀鈴会会員が精神的にも技巧的にも急成長を遂げた時期であるということである。四・六事件に始まる白色テロがなければ、より多くの優秀な人材を台湾文壇に送り出すことになっただろう。それでもこの時期に楊逵の指導や影響を受けた若者の中から後の台湾文壇を背負う人材を多く輩出したことは、白色テロによって全ての可能性の芽が摘まれたわけではないことを示している。楊逵や「橋」の主筆歌雷等により創出された、二・二八事件後の一時の文壇の活気は、断絶の危機にあった戦前と戦後の台湾文学の伝統をつなぎ、戦後第一世代の文学者を育てるにあたり、重要な時期となった。

注

- 1 藍博洲『天未亮』（晨星出版、台湾、2000年4月）、『麦浪歌詠隊』（晨星出版、2001年4月）。
- 2 丸川哲史「1948年前後の台湾新文学運動にかかわる論争と脱植民地化の問題—新生報“橋”副刊を中心に—」（『日本台湾学会報』vol.2、2000）、「台湾のポスト植民地期（1945-50）における文学—異文化接触とステレオタイプの形成—」（『日本台湾学会報』vol.3、2001）、「光復後の楊逵」（『戦争責任研究』vol.34、2001年冬季号）。
- 3 許詩萱「戦後初期（1945.8～1949.12）台湾文学的重建——『新生報』『橋』副刊を主要探討対象」（国立中興大学中国文学系修士論文、台湾、1999）。
- 4 陳建忠「戦後初期現實主義思潮與臺灣文學場域的再構築——文學史的一個側面（1945-1949）」（成功大学文学史研討会の報告、台湾、2002）。
- 5 台湾大学の社団。中国の民謡を歌って台湾全土をまわった。
- 6 本名は朱商彝。筆名は朱實、辰光。俳号は瞿麥。本文中では朱實。銀鈴会の創始者の一人。当時は師範学院教育系の学生。四・六事件で指名手配され大陸へ逃亡。大陸へ渡ってからは朱實で通している。上海の対外友好協会では日中の文化交流に携わり、日中国交回復の際には周恩来の通訳をつとめた。
- 7 本名は林亨泰。筆名は亨人。本文中は林亨泰。1947年加入。当時は師範学院教育系の学生。銀鈴会解散後も創作活動を続け、現代派の符号詩で一躍有名になる。詩刊『笠』の発起人の一人。
- 8 本名は詹益川。筆名は緑炎、詹冰。本文中では詹冰。詳細な加入時期は不明。『ふちぐさ』期からの

- 会員。日本留学時代の1943年『若草』で堀口大學に詩「五月」で認められる。帰台後は薬局の仕事の傍ら創作活動をしていた。詩刊『笠』の発起人の一人。
- 9 本名は陳金連。筆名は金連、錦連。本文中では錦連。1949年加入。当時は彰化駅の通信員をしながら創作活動をしていた。詩刊『笠』の発起人の一人。
 - 10 本名は蕭金堆。筆名は淡星、蕭金堆、後に蕭翔文。本文中では蕭金堆。詳細な加入時期は不明。当時は師範学院地史科の学生。『台湾万葉集』の歌人の一人で、NHK放送の関連番組に出演した。
 - 11 本名は張彦勳。当時の筆名は張紅夢。本文中では張彦勳。銀鈴会の創始者の一人で『潮流』主筆。当時は后里国民学校の教師をしながら『潮流』の編集を担っていた。
 - 12 「漢俳」は日中文化交流の中で生まれた新しい詩形で、漢文による俳句。台湾には詹冰が作った俳句を元にした新しい詩形「十字詩」もある。
 - 13 元会員の回顧録や論文、加えて筆者が朱實、許育誠、錦連、林亨泰、詹冰の各氏と文通及びインタビューにより得た証言を指す。
 - 14 現存しているのは『ふちぐさ』1冊、『潮流』5冊(1948年5月、7月、10月、1949年1月、4月発行)、『聯誼会特刊』2部(1948年8月、1949年1月)、『潮流月刊』2部(1949年3月、5月)なお『潮流』『龍安文芸』は陳建忠氏よりご提供いただいた。
 - 15 「会員文藝動態」は1948年7月26日から1949年3月9日まで。
 - 16 『力行報』の文芸欄は横地剛氏、黎湘萍氏、丸川哲史氏よりご提供いただいた。
 - 17 林亨泰「跨越語言一代的詩人們」(『笠』、台湾、第127期、1985)。
 - 18 林亨泰「銀鈴会與四六学運」(『台湾春秋』、台湾、第10期、1989)。
 - 19 林亨泰「“銀鈴会”史話」(『台湾文藝』、台湾、第118期、1989)。
 - 20 林亨泰「銀鈴会文学観点的探討」(『台湾詩史「銀鈴会」論文集』、彰化縣立文化中心、台湾、1995)。
 - 21 朱實「潮流澎湃銀鈴響」同上書、21頁。
 - 22 張彦勳「銀鈴會的發展過程與結束」同上書、32頁。
 - 23 三木直大『『靈魂の産聲』—ある台湾詩人の日本語詩集』(『人間文化研究』第三巻、1994年)。
 - 24 三木直大「林亨泰中文詩的言語問題」(『林亨泰文学会議論文集』、2001)70-73頁。
 - 25 三木直大「林亨泰“現代派”詩的郷土性」(『林亨泰文学会議論文集』、2001)52-57頁。
 - 26 陳明台「清音依舊纏繞—解散後銀鈴会同人的走向」(『台湾詩史「銀鈴会」論文集』、1995)112頁。
 - 27 阮美慧「“銀鈴会”的詩史位置之重估」(葉石濤及其同時代作家文学國際學術研討会にて報告、台湾、2001年12月)。
 - 28 阮美慧、同上論文、4頁。
 - 29 阮美慧、同上論文、26頁。
 - 30 本名は詹明星。筆名は『ふちぐさ』では似而非歌人、『潮流』では明星、後に微醺。本文では詹明星。当時台湾大学の学生。後に外交官として日本に駐在した。
 - 31 本名は許龍深。許育誠は通称。筆名は子潜。本文では許育誠。1948年春加入。当時は師範学院体育系の学生で卒業後は教師、後に実業界に転じる。退職後、文学作品の執筆を再開。日本の詩誌『昴』同人。
 - 32 本名は賴裕傳。筆名は籟亮。本文では籟亮。当時は師範学院の学生。1950年代に銃殺された。
 - 33 本名は陳金河。筆名は埔金。本文では埔金。当時は師範学院教育系の学生。
 - 34 本名は張鴻飛。筆名は南十字星、後に松翠。本文では張鴻飛。当時は師範学院英文学専攻の学生。
 - 35 日本に留学していた胡風が翻訳、東華書局より出版。
 - 36 陳芳明編「二二八事件前後」(『楊逵的文学生涯』、前衛出版、台湾、1988年9月)169頁。
 - 37 歌雷「歡迎本省作家投稿」(『新生報』「橋」、第93期1948年3月22日)。
 - 38 林亨泰(『見者之言』彰化縣立文化中心、台湾、1993年)203頁。

- 39 楊逵「如何建立臺灣新文學」（「橋」第96期1948年3月29日）。
- 40 孫達人（「橋」「編者・作者・読者」欄、第85期1948年3月3日）。
- 41 張彦勳「銀鈴會的發展過程與結束」（『台灣詩史「銀鈴會」論文集』、1995）27頁。
- 42 林亨泰、「銀鈴會文學觀點的探討」、同上書、35頁。
- 43 張彦勳「編集後記」（『潮流』1948年春季号、1948年5月1日発行）33頁。
- 44 張彦勳「荊棘之道——兼談創辦銀鈴會的經過」（『笠』vol.4、台湾、1964年12月15日発行）15頁。
この文章では銀鈴會解散の理由として会員の言語問題を挙げているが、政治的に締め付けが厳しい時期だけに四、六事件や会員の逮捕等の外部的な事情には言及できなかったと思われる。
- 45 朱實「再刊に際して」、同上誌、32頁、原文は日本語。
- 46 楊逵、前掲論文、原文は中国語。
- 47 同上論文、9頁。
- 48 『中国文芸叢書』全六輯（東華書局、1947-1948）、日中文対照、魯迅『阿Q正伝』（二・二八事件前の1947年1月出版）、茅盾『大鼻子的故事』、郁達夫『微雪の早晨』、沈從文『竜珠』、鄭振鐸『黄公俊的最後』、楊逵『送報伏』。
- 49 『台湾文学叢刊』第三輯には銀鈴會会員の朱實と張彦勳の作品も収録されている。第二輯に掲載された第三輯の予告には、蕭金堆の短編も入っているが、実際には収録されなかった。なお第三輯には第四輯の予告もある。
- 50 陳建忠「戦後初期現實主義思潮與臺灣文學場域的再構築——文學史的一個側面（1945-1949）」（成功大学文学史研討会の報告、台湾、2002）18頁。
- 51 同上論文、19-20頁。
- 52 「夢と現実」（『潮流』1948年夏季号）原文は日本語。
- 53 丸川哲史「光復後の楊逵—台湾文学 1945-49年への一考察—」（『季刊 戦争責任研究』vol.34、2001年）10頁。
- 54 楊逵が顧問になった詳しい時期は不明であるが、『潮流』1948年夏季号に文章が掲載されていることから、夏頃と推測される。
- 55 蕭金堆（蕭翔文）、前掲書、82頁。
- 56 朱實「贈—茶廠実習に出発する子潜淡星両兄よ」（『潮流』1948年秋季号）。
- 57 蕭金堆「吞蝕」（「橋」第155期8月20日）。
- 58 許育誠（子潜）「阿葉」（『新生報』「台湾婦女」第79期1949年2月13日）。
- 59 「銀鈴會第一次聯誼會記錄」（『聯誼會特刊』、台湾、1948.8.29）原文は中国語。
- 60 楊逵「寄《潮流》」（『潮流』1948年秋季号 1948年10月）。
- 61 林亨泰「銀鈴會文學觀點的探討」、前掲書、42頁。
- 62 典故は『書経』盤庚上。「星星之火可以燎原」は抗日戦争でよく用いられたスローガンの一つ。
- 63 藍博洲『麦浪歌謡隊』（晨星出版、台湾、2001年）30頁。
- 64 張友繩「我與我的報」（『力行報』第18期1948年1月1日）。
- 65 筆者は当初、楊逵が「力行」の主筆を兼ねていた可能性を考えていたが、現存する「力行」の記事には所々に「楊逵先生」とあり、また「新文藝」における楊逵の公明正大な態度を考えると、「力行」でのみ名を伏せるということも考えがたく、従って楊逵が「力行」の主筆である可能性は低いと思われる。
- 66 芷「路—一年来的文芸欄編輯」（『力行報』文芸欄「力行」1948年11月13日）、「路—一年来的文芸欄編輯（続）」（『力行報』文芸欄「力行」1948年11月14日）日本語訳は筆者。
- 67 本名は施学連。筆名は金秋。「力行」創刊時からの投稿者。銀鈴會加入時期は不明。本文中では金秋。錦連「記銀鈴會二、三事」（『文学台湾』vol.2、文学台湾雜誌社、台湾、1992年）と朱實によれば、

- 金秋は当時 30 歳、銀鈴会では最も年上の会員で学校の職員をしていた。肺病を患って自宅療養しており、朱實と春秋(朱商秋)兄弟、錦連以外の会員との往来はほとんどなかったという。
- 68 本名は張有義、後に張克輝。筆名は有義。銀鈴会加入時期は不明。廈門大学在学中の 1949 年 5 月解放軍の遊撃隊に参加。現在は中国政商会議副主席。
- 69 藍博洲『天未亮』(晨星出版、台湾、2000 年)。
- 70 1947 年 5 月 4 日に中国上海の学生が「反飢餓、反内戦、反迫害」を唱えて大規模なデモを行い 20 日に国民党軍と警察に武力で鎮圧された事件。更に国民党当局は 5 月 30 日から 6 月 1 日未明に全国の学生運動の取り締まりを行い、多くの学生が逮捕された。
- 71 藍博洲『天未亮』(晨星出版、台湾、2000 年) 72 頁。
- 72 林亨泰『靈魂の産聲』(銀鈴会・光文社発行、台湾、1949 年) 日本語、「潮流叢書 1」。
- 73 張彦勳「銀鈴会的發展過程與結束」前掲書、32 頁。
- 74 張彦勳が 3 回、蕭金堆が 1 回、林亨泰が 1 回(1 日)逮捕された。
- 75 「第一次新文藝座談会記録」(『力行報』「新文藝」第 3 期) 1948 年 8 月 16 日。
- 76 「徵求『實在的故事』」(「新文藝」第 8 期 1948 年 9 月 20 日)。
- 77 横地剛「“民主刊物”と台湾の文学状況」(日本台湾学会第 5 回大会、2003) 8 頁。
- 78 蕭金堆「兩個世界」(「新文藝」第 11 期 1948 年 10 月 11 日) 訳は筆者。
- 79 楊達「“實在的故事”問答」(「新文藝」第 11 期 1948 年 10 月 11 日)。
- 80 蕭金堆「芥川比呂志中尉」(「新文藝」第 13・14 期 1948 年 10 月 22・24 日／「橋」第 187 期 1948 年 11 月 22 日)。
- 81 丸川哲史「光復後の楊達—台湾文学 1945-49 年への一考察—」(『季刊 戦争責任研究』vol.34、2001 年)。
- 82 許育誠(子潜)「黄昏的脈膊」(「橋」第 194 期 1948 年 12 月 13 日)。
- 83 林亨泰書信(2004 年 4 月 28 日)。
- 84 林亨泰(亨人)「橋」第 108 期 1948 年 4 月 30 日)。
- 85 林亨泰(亨人)「靈魂的秋天」(「橋」第 150 期 8 月 9 日)。
- 86 張彦勳(張紅夢)「葬列」(「橋」第 160 期 1948 年 9 月 3 日／日本語原詩は『潮流』1948 年夏季号「葬式」)。
- 87 朱實「烏來頌」(『力行報』「新文藝」第 118 期 1948 年 9 月 3 日) 原詩は中国語、訳は筆者。
- 88 朱實は「鯁懸」(「橋」第 103 期 1948 年 9 月 22 日／日本語原詩は『潮流』1948 年夏季号「屈する者」)。
- 89 詹冰(綠炎)「新的座標」(「橋」187 期 1948 年 11 月 22 日／日本語原詩は『潮流』1948 年秋季号「新しい坐標」)。
- 90 張彦勳(紅夢)「墻壁・時鐘」(「橋」206 期 1949 年 1 月 31 日／日本語原詩は『潮流』1949 年冬季号「断想二題」)。
- 91 林亨泰(亨人)『山的那邊』「麗梅」(「橋」第 103 期 1948 年 4 月 14 日) 原詩は日本語、『林亨泰全集 1』22 頁
- 92 林亨泰(亨人)『山的那邊』「我」(「橋」第 103 期 1948 年 4 月 14 日) 原詩は日本語、『林亨泰全集 1』24 頁
- 93 林亨泰(亨人)「新路」(「橋」第 171 期 1948 年 10 月 6 日) 原詩は中国語、訳は筆者。
- 94 林亨泰(亨人)「歸來」(「橋」第 215 期 1949 年 2 月 21 日) 原詩は中国語、訳は筆者。
- 95 蔡徳本「《龍安文藝》終於找到了」(『文學台灣』vol.46、台湾、2003) 176 頁。
- 96 林亨泰「創世記三十周年詩論評獎」(1984)「榮後台湾詩獎」(1992)等、詹冰「資深台湾作家獎」(2000)「榮後台湾詩獎」(2001)等、錦連「台湾新文学特別推崇獎」(1991)「榮後台湾詩獎」(1995)等、蕭金堆「笠詩獎創作獎」(1993)等、張彦勳「台湾文芸賞」(1965)「教育部兒童文学小説佳作獎」(1976)等受賞。